

婦人の子ども

第八卷
第十號

フベール會發代

第八卷第拾壹號目次

●女教師問題と保姆	湘南生
●兒童の個性及び其取扱法	松本孝次郎
●幼稚園問題	和田實
●松平定信の半面	雨峰生
●育兒の經驗	某夫人
●再び幼稚園の共同遊戲に就て	和田實
●音聲と婦人の氣質	樂天子
●此頃の料理	石井泰次郎
●黄金の魚	とよ子

本會役員

會長 東京女子高等師範學校長
幹事 東京女子高等師範學校教授

編輯

高嶺村田 五秀
中池雨大 小田關 關森田 田井口 田田 田田 網
下福武川和 田田 田田 實
和 田 田 田 實

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾圓の割合で一ヶ年分なまゝて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一冊郵税共金拾一錢
- 六冊前金郵税共六拾錢
- 拾二冊同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増



第八卷第十號

女教師問題と保母

女教師問題は今も尙未解決の問題である。或は經濟上利益であると云ひ或は勤務上に於ては到底男教員より劣位にあることを免れぬと云ふ。共に争はれぬ長所と短所とであつて是以外の點は如何様にも變化することが出来ても此二點は永く男女兩教員の差違であるだらうと思はれる。尤も未婚の女教員は時として既婚の男教員より優等なる勤務狀態を呈することがないではないが併之を以て全斑を押すことの出来ぬことは勿論のことである。殊に家庭の主婦たる女教員は一方家庭に於ける其主婦たる任務を缺くにあらざれば到底優等なる勤務狀態を呈することは出来ぬものである。故に吾人の見る所を以てすれば其夫が同一學校の教員ならざる限り主婦の女教員は到底通常の男教員と勤務上に於て其優劣を比較する資格なきものと云はざるを得ない。幼稚園に於ても此問題は早晩起り來るであらうと思ふが幸にして現在に於ては然したる論難の火の手の上らないのは蓋し現在の幼稚園の勤務時間が一般に學校よりも少ないのと幼児保育上の直接活動の外事務的附帶的勤務や下調べなどの成績檢閲だのと云ふものない爲めに致えて不都合のない爲めであらう。併し此有様は未來に於ても長く變化せぬであらうか疑はしいのである。否吾人は早晩此狀態の變化する秋が來るであらうと豫期して居る、又一方からは此狀態を長く續かせぬと私に盡力したいと思ふて居る。何となれば現在の幼稚園に於けるが如き保育の方法は餘りに呑氣に過ぎて居る。之を改良すると共に保母の任務は一層繁劇を加ふることは避く可からざるもだらうと思ふからである。未來の幼稚園保母たらんとする人は覺悟する所がなければならぬ(湘南生)

兒童の個性及其取扱法

文學士 松本孝次郎

次には自己的感情の非常に極端に達したる所の個性即ち主我的兒童と云ふものに付てお話をします。子供の中には自分の勝手な事ばかりを主張する所の所謂我儘な子供と云ふのがありますが、之が即ち茲に謂ふ主我的兒童なのであります。主我的の子供と云ふのは、唯だ自分の權利ばかり主張して居つて少しも他の人の權利を認めないと云ふやうな性質の子供を謂ふのです。所謂我儘な者の事を言ふのです。斯う云ふやうな性質の子供は中等以下の社會或は父上等社會の子供に出来易いのです。どう云ふで上流社會の子供に出来易いかと言ひますと、上流社會の子供を取扱ひます所の家庭教師或は保姆と云ふやうな者は、矢張り子供に對してでも恰も主人と雇人と云ふやうな關係を有つて居り易いもので、子供をば適當に導くべき筈の人が、自分の思ふ通りに出来ぬで却て

子供の意を迎へると云ふやうになり易いものなんです。親の心から言ひますと、子供が餘り泣かないとか騒がないとか云ふことを悦ぶもので、良く子供を取扱つて呉れると云ふ方は認めないで、唯だ子供の機嫌が克ればそれで以て満足して居ると云ふやうな親が多いものですからして、そこで中々子供に附添ふて居る人が教育的精神を以て子供を取扱ふと云ふことが容易に出来ぬで、詰り子供の製作品が下手に出来て居つても上手に出来て居ると云ふやうに御世辭を言はなければならぬやうな位地に居ることがあるので、さう云ふやうな有様でありますからして、詰り子供が自分程えらい者は無いと云ふやうな心を起し易いのです。で自分の言ふ事はどんな事でも聽かれなことは無いと云ふ方の考を持つやうになるから、それで遂には我儘者になつて仕舞ふのです。それから中流以下の家庭に於てはどうかと云ふと、多くは親が子供に直接に接して居りますからして、そこで子供に向つて命令を與へる事柄は之を禁ずると云ふ方の場合が多いのですけれども、併し其

命令に反抗されても或は禁じたる事を侵されても兎角之を實行すると云ふ精神に乏しいから、充分に親の意思を徹底する迄に行かないのです。殊に可けないのは親自身が自分の機嫌のよい時には割合に子供を寛大に扱ふ、それから又自分の機嫌の悪い時には割合に子供をば嚴格に扱ふと云ふやうな風に、場合に依て親の子供に對する態度が非常に違ふと云ふことがあるのです。さう云ふ譯で同じ子供に對する命令と云ふても、それが同じ標準から出て居らない、詰り子供の教育の方針と云ふものが一定して居らないと云ふやうなさう云ふ弊害があるのです。一度子供に命令を與へて其命令に子供が反抗するとか、或は其命令が侵されると云ふことがあつた時に之を赦したならば、抑々主我性と云ふもの、端緒を開いたと言ふて宜いのです。其代りに子供に向つて親が命令をすると云ふことは、初めから餘程能く考へて命令をしなればならぬのです。保母諸君が此我儘な子供と云ふものを御扱ひになるのに、矢張り保母の言ふた事でも之を聽かないと云ふことを必ず御經驗にな

るでせう。家庭で以て悪い性質を付けて来たものを幼稚園で扱ふのですから、どうしても理論の通りに行かない事が多いのです。さう云ふ子供に向つては是非命令を出すさう云ふことは少なくしなければならぬ。何ぜかと言へば保母が一度命令を出したならば、従しそれを破られても何處迄も此方が實行させなければならぬと云ふ覺悟を持つて居ると云ふと、容易に命令を發することは出来ないから、詰り命令を少なくして之を教導すると云ふ方の部分を多くしなければならぬのです。現在の家庭に向つても私は命令と云ふ部分を少なくして教導と云ふ部分を多くする方が無論宜いと云ふことを言ひたいのです、詰り命令と云ふものが多く行はれて居る譯は、頗る簡單で以てさうして時間餘り取らないで親の意志を發表することが出来るからして、命令を多く用ゐるのであるけれども其効力の方から言へば到底教導には及ばないであらうと思ふのです。其代りには愈々親が命令と云ふ性質のものを與へた時には、どう云ふ事があつても之を實行させると云ふ決心を以てやらなければ

ばならぬのです。それで親が命令と云ふ意味のものゝ與へる時には、成るべく其言葉及び其態度と云ふものは、確ツかりして居る方が宜いのです。能く世間の母親が『どうも困りますね』と言ふて笑顔をして命令して居るのを見受けますが、ア、云ふ風では兎角命令が侵され易いのです。即ち其時の親の態度が親として威嚴を全うするやうな態度でないからして、其命令と云ふものはどうしても侵され易いのです。それから一つの家庭に於て親が命令をするのをば子供が實行しない。それを親が責めて成るべく命令を實行させやうと云ふ時に、他の人が之を仲裁するやうな事を能く見受けませんが、それ等は決して良い方法で無いのです。寧ろ仲裁をしないで其命令を實行することを傍らから迫るとか、或は其命令を實行するに付ての助けを與へるとか云ふ方法を採るのが宜いのです。子供を取扱つて行くに付ては只一度と云ふことが何時でも本になつて行くのですから、一度でも見遁してはならない。只一度だからと言ふて寛大な取扱ひをすると云ふことが、詰り其子供の教育の

旨く行かなくなる始めであつて、詰り云ふと子供自身が斯うして呉れ、斯う云ふ物が欲しいと主張することを能く親が考へて、さうしてそれが悪い事だと思へば、先づ教導と云ふ性質で行けるものならば矢張り教導で取扱つて置く。若し又教導の性質では取扱ひ難いと思へば今度は命令を用ふる。命令は則ち子供を仕付けて行く上に於ての最後の手段と言ふても宜いのです。命令に代はるべき所の手段と云ふものは他には無いのです。子供の主我性が養はれると云ふことは、自らの言出した事が何時でも行はれると云ふ経験を持つからして我儘になるので、或場合には即ち正當ならざる事は自分の言出した事でも制限されるものであると云ふ経験を子供が持つと云ふと、主我性が養はれないやうになつて來ます。子供が或部分の不正なる要求は之を却けられる、或部分の正當なる要求は之を採用されると云ふことを経験しますれば、主我性と云ふものが餘程減つて來るのです。それ故に此主我性を減しますするには、家庭で以て子供に對する命令又子供の要求と云ふものを考へ

て取扱ふのが非常に大切でありますが、幼稚園に於ては遊戯の間に於て自然と此主我性を減らすことが出来る。即ち同じ遊び仲間の子供と云ふものは、同じく幼稚園に来て居りますならばどの子供でもが皆同等の權利を有つて居る筈のものでありまして、一方の子供だけが自分の權利を勝手に主張すると云ふことは逆も出来ませぬのですからして、そこで他の子供と共に交はり共に遊ぶと云ふ間に於てどうしても制限を受けるやうになつて、己れの思ふ事が一から十迄其通りに用ひられるもので無いと云ふことが分つて來るのです。詰り自分の思ふ事の幾分かは犠牲に供せられると云ふ経験を待ちますからして、詰り我儘と云ふものが減つて來るのです。丁度世間を餘り知らない人が他の人と交際をするに依て廉が取れると云ふのと同じやうなもので、遊戯の場合に於て此主我性を止めさせると云ふ方針を執ることが非常に必要な事でありませう。此主我性の中でも自分の權利をば主張すると云ふ點は固より悪い事で無いので、唯だ自分の正當な權利を主張して居るだけな

らば宜いけれども、それか不正當な範圍迄行くので悪いのだからして、能く其子供の持つて居る所謂氣力と云ふやうなものをば全たく減さないやうに氣を付けることが大事である。詰り子供自身が確ツかりした考を失ふ迄に之を抑付けて仕舞ふと云ふことは亦た是れ宜くないことである。詰り親が子供に對して壓制主義と云ふものを用ふると、竟に其子供は親の爲めに左右せらるゝ許りでは無く、他の人に迄どうでもされるやうな人物になつて仕舞ふからして、そこは又能く其程度を考へて見なければならぬのです。要するに今日多く世の中にあります所の主我性兒童と云ふものは、親が子供の取扱ひ方を誤つて不正當なる要求迄通させたと云ふ所から出て來るのが多いのです。それから又子供が餘り他の子供と共に遊んだことが無いと云ふやうな者であつた時には、どうしても我儘と云ふ性質を多く持易い。それだからして子供の社會に於ての交際と云ふものは、さう云ふ所から言ふても餘程肝要な事でありまして、子供同士を遊ばせる、特に同じ年齢の子供と遊ばせると云ふ

のが非常（ひじょう）に必要（ひつよう）のことであります。年齢（ねんれい）が違（ちが）ふと其間（そのあひだ）にまた餘程（よほど）考（かんが）へべき事（こと）が多（おほ）くなつて來ますからして、私は成るべく同一（どうい）程度（ど）の者（もの）を選（えら）びたいと思（おも）ふのであります。

双六の話（今泉雄作氏）

双六は一番古くから知られて居る遊戲で其傳來は未だ確かに夫と考へた人もありませんが私は三韓から渡つたものと思ひます、双六は元スグログと云つたもので、スグは則ち高麗音（こりや）です。何うも朝鮮から來たものと思はれる、是は往古大流行で専ら上流社會の遊戲であつたが追々中流以下にも及ぼし賭事（どじ）をするやうになつたで終には禁止された事もある、書記にも持統天皇三年に之を禁じた事が出て居ます其後も度々禁ぜられたが當時は布（ぬ）とか道具（どうぐ）とか、品物（しなぶつ）を賭けた、中には家屋敷（けあき）を賭けた者もあつた、最初藤原時代には上流（じやうりゆう）にのみ行はれ追々下等（げとう）になつて足利時代にも双六を博奕（はくぎ）に用ひて居た又鎌倉時代に佛法（ぶつぽう）双六といふのが出來た、之は前の双六の變化したのです天台宗（たいたいしゅう）のやうな名目の多い宗教（しゅうきよう）で其名目（ななめ）を一山の子僧達（しよそうだう）に覚えさせる爲めに造つたのである、賽（さい）も一二三の代りに南無諸佛（なんぶしよぶつ）の六字（ろくじ）を用ひてある、是と同じ双六だが足利中世に至つて地獄（じごく）といふ場所（ばしょ）を拵（こ）へ其處へ入つたものは再び出る事の出來ぬ規則（きそく）を設けた双六が出來た、ヨウチン（永沈）双六といふのは是です、夫から徳川時代に道中双六が現はれた、確（たしか）か貞享頃（しんかう）と思はれます

幼稚園問題

和田實

先（せん）年（ねん）師範（しはん）學校（がく）令（れい）が改（か）正（せい）されて所謂（いふところ）保育法（ほいくぽう）と云ふものが全國各師範學校（ぜんこくかくしはんがく）に於（お）ける教育科（きよういく）中の一（いち）要目（ようもく）となつたけれども教育界（きよういくかい）に於ける幼稚園論（きようえんろん）は今（いま）尚未（ふた）定の問題（もんだい）である。甚（いた）だしいのは現在（げん）在（ざい）幼稚園（きようえん）に保母（ほぼ）の職（しやく）を採（と）つて居る人でさへ幼稚園（きようえん）に關する理想（りしやう）や見識（けんしき）を建（た）てること（こと）が出來ないで單（ただ）に前人（ぜんじん）の形式（けいしき）を逐（お）ひ方法（はうほう）を模倣（もはう）するに過ぎないものが多い、況（いは）んや根本問題（こんぽんもんだい）と來ては矢張（やは）御同様（ごどうよう）半信半疑（はんしんはんぎ）の人（ひと）であると云ふに至（いた）つては斯道（しど）の爲め慨（がい）せざるを得（え）ない。全體（ぜんたい）幼稚園（きようえん）と云ふものは教育上（きよういくじやう）何れ位（なんどい）の效果（くわうくわ）を奏（そう）し得（え）るものか、其必要（きよひつよう）なるは上流社會（じやうりゆうしやかい）の爲め（ため）か若（わか）しくば下流細民（げりゆうさいみん）の爲め（ため）か、抑（おさ）も亦（また）一般（いぱん）の世人（ぜじん）の爲め（ため）か等の問題（もんだい）を初（はじ）めとし、種々（しゆしゆ）な幼稚園問題（きようえんもんだい）を解決（かいけつ）することは目下（めげ）の急務（きふ）ではなからうか、吾人（われ）は之（これ）を解決（かいけつ）せりと云ふ譯（わけ）ではないが、随（さ）より始（はじ）めと云ふこともあるから一（いち）と通（とほ）りの意見（いけん）を呈（てい）出して

先進の教を乞はうと思ふのである。

一 幼稚園の効果

幼稚園教育の効果は何うであるかと云ふ疑問、換言すれば同じ小學校の生徒でも幼稚園を経て來たものと直接家庭から來たものとの優劣は何んなであらうかと云ふ問題は從來最も多く吾人に向つて發せられた疑問である。そして世人の多くは此結果を以て幼稚園問題を根本から解決し様として居る様に見える。併し此考は餘り適切な考ではなかつた。勿論從來の幼稚園教育の方法が悉く失敗に了つたと云ふことを證明するには充分であつたとは云ひ得るけれども之を以て直に幼稚園其物を否定することは出来ない。甚だしいのは自分は教育者でありながら幼稚園を以て却つて教育上有害なものであると主張する人もあるが、是も現在の一般幼稚園の實際を參觀して現在の保姆の活動に嫌らない爲めと云ふならば無理もない話で、此點に於ては吾人も大に同情を表さなければならぬが、併し之とて直に幼稚園其物を否定するのはちと早計である。

要するに從來に於ける幼稚園の効果は顯然たるものがないと云ふことは出来るが未だ以て將來の幼稚園を否定する程に有力な反證は舉らないのである、それは人に因ると幼稚園から來た生徒は早熟であるとか、人に狎れ易いとか、遊び半分で行かぬとか色々な攻撃を加へる人があつたけれども之は皆晩くも半年か一年の間には消えて仕舞ふ問題でつまりは教育者其人を得ず教育の方法又宜しきを得なかつた爲めではあるが未だ以て幼稚園其物を非定する材料にはならないのみならず、今日に於ては教育の理論も方法も可なり進歩して來て居るから此理論を尋ね方法を應用して掛ければ確かに一道の光明を前途に認めることが出来る。従つて幼稚園の根本問題に關する理想は現在に於て建設せられ得可きものであると信するのである。

二、普通教育の一機關としての幼稚園
谷本博士が嘗て京阪神聯合保育會で幼稚園に就て演説された中に次の様な一節がある。

日本今日の狀態から云ふと幼稚園は素より太だ入用でありませうが私共の小孩には要らぬ。斯う云ふと私の家庭は善長であ

ると云つて誇る様に思はれますが強ちさう云ふ譯ではない。併し乍ら私の家庭の子供は幼稚園に上げるには及ばない、今日幼稚園の入用なのは一面は上流社會の兒童であると思ふ之れは名は上流社會であるが實は我々の中流社會に比べると云ふと大々下流であるので上流社會の内には往々子供を幼稚園にやらすし、てお傳とかおんばとかを附けて無法に子供を育て、居るものあり、ありますが夫れでは子供を利巧なものにしやうとして、却つて悪くする様なものでありまして實に上流の家庭に生れたものは氣の毒なことである。上流の家庭に向つては幼稚園は必要であると申すのであります。併し之と同時に幼稚園は下等の家庭に向つても必要であると云ふのであります。傳引きや其日暮ぎの下等社會のものが其子供を放任して置くのを見ると云ふと我々は常に涙がこぼれるのであります。故に是等の下等社會の子供を幼稚園に入れるのも尤も必要であると思ふのであります。中流社會は第二にして宜しい然るに日本に於ては上流の者も幼稚園へ行かなければ下等のものも行かないと云ふのは一つ考へて見なければならぬことと思ふのであります。

此谷本博士の演説が原因をなしたもののか阪神地方の多くの保母の中には幼稚園を以て特殊の教育機關の如く心得て、普通一般の家庭には不必要である故に自分の子供は幼稚園には出さぬと云つて得々として誇つて居るものがあるそうである。若し果して然りとしたならば幼稚園は單に社會一部

八

の人の爲めに設けらるべき特殊教育機關で感化院や盲啞學校など、撰ぶ所のないものとなつて仕舞はなければならぬ。是が果してフレールのであつたらうか勿論フレールの教育説は今日に於ては既に取るに足らぬに相違ないと云ふことは恰もヘルバルトの教育説が今日の學界に捨てられて居るのと同じである。併し今日の學界に捨てられたからとて教育史上に於けるヘルバルトの功績は之を没することが出来ないと同じ様にフレールが幼稚園を創設するに至つた所の其動機、趣旨に至つては千古に類く可きもので決して捨つ可きものでない。従つて幼稚園なるものが特殊の教育機關として生れたものでないと云ふことはフレールの傳記が之を證明して居ると云はねばならぬ。斯く云ふと難者或は夫れは狀況論である。未だ以て幼稚園の一般教育機關たる議論にはならない。と云はれるかも知れぬ。實際以上の所論は單に狀況論に過ぎないが併し翻つて現在の教育學上より考へても確かに幼稚園の一般教育機關たることは之を承認することが出来る。と云ふ譯は教

育學總論にも論じてある通り教育は一個の技術である。然も今日では漸次専門の技術となつて來て居る。之を往昔の教育法に較べて見ると理論は精しく方法は綿密であるが相當の練習を経たる教育家には到底素人の及ぶ可きでない。故に家庭の事情の許す限りは成る可く速に之を教育家の手に托するのが安全である。決して小學校に行く迄放任して置く可きでない。人或は母親が多少教育思想を有するならば家庭で少し注意すれば、却つて幼稚園以上の成績を得られる。と云ふ人もあるが、之は其母親の技術次第の話で議論にはならぬ。世間多くの母親の中には専門家以上の教育思想あり教育術を心得て居る婦人もあらうから斯有なことは出來ないとは云はれないが併し稀であつて決して普通一般には求められる筈はない。數少き教育家の子弟は別にして置いて普通一般の家庭よりしては矢張成る可く早く専門家に托するのが有利であると云はねばならぬ。且又母親なるものが如何に子女の教育に熱心であるか

らとて一人の子使にソー／＼は付きに就いて世話をすると云ふ譯には行かぬ。生殖には時期があるから長子が三四才に達する頃には第二子第三子が首を出して來るので否でも應でも生長した長子は先づ措いて赤子の世話に手間隙間掛けねばならぬことゝなる、然るに三四才に達した長子は盛んに暴れ回つて一寸も目が離されない殊に子供は一人では遊べないで何かと遊對手を要求して仕方がなければ母親を友達に仕やうとする。斯うなつては何うしても一日の中數時間は長子の教育を分擔して呉れる人を求めずに居られぬ、是が自然の順序である。幼稚園は此自然の要求に適應して居る所の教育機關で畢竟、普通一般の家庭の爲めに當然なくて叶はぬ教育機關である。家庭に閑暇の人多くて子女の世話に手を欠かない處ならば或は是等の機關を除くことが出来るかも知れないがそれとても専門の教育家以上に誤りなき方法を以て幼兒を導き得るか云ふことは未定の問題である。要するに幼稚園なる教育機關は普通一般の家庭に極めて必要なるものであると云はねばならぬ。唯

茲に因ることには現在の各幼稚園に於ける保育方法の極めて不合理なることの多いことである。世の幼稚園非難者の多くは此方面から切り込んで來られるので誠に閉口する。實際吾々の眼から見ても現在に於ける一般幼稚園の教育法は實に亂暴なものが多い、けれども之は幾等でも改良することが出来る。方法が悪いからとして幼稚園其物を非定するのは角の爲めに牛を殺す類であらう。

三、幼稚園の本領

智識技能を授與することを活動の中堅として教育を施さうと云ふのが學校の本領であらうとしたならば幼稚園の本領と云ふ者は何であらうか。是の解決が異なるに従つて幼稚園の根本問題に變動を生ずるのであるから幼稚園問題の中では大切な問題である。現在多くの幼稚園を參觀して見るに何處の幼稚園でも最も重きを置いて居るものは何であるかと云ふと手技である。手技を中心として之に談話や唱歌や唱歌遊戲をあしらつたものが即ち幼稚園である。所謂フレール式の幼稚園は皆斯うである。換言すれば幼稚園の本領は作業を中堅とし

たる教育と云ふことになる様である。併し是は合理的ではない。成程作業は子供の悦ぶものに相違ない。けれども之を幼兒の活動の全體から見ると極めて小部分で此他に智能的の遊戲や模倣的の遊戲が頗る多いものである。從來フレール式の幼兒教育法が無理押付けをする場合が多かつたのは畢竟餘りに作業的であつたから幼兒の自然活動には不適切であつたと云はなければならぬ。

次には近時米國あたりに盛に行はれる處の所謂新式幼稚園と云ふ側の教育法である。例を上げて見ると先づ一つの話をするとする。そをすると次には其話を主題として之に因める唱歌をする。次には之を材料として話中の何物かを手細工に因つて發表させる。尙進んでは其話の筋道を劇的に實演させて遊ばすと云ふ風で、名けたらば統合主義とでも云ふ可きである。そうして此主義の教育法の特に注意す可き價值のあるのは其遊ばせ方が多方面で決して一種の遊戲のみを重視すると云ふことの無いのと、且つは幼兒の興味を主として考へて如何にせば子供に最も面白かる可きかと云ふて

とには餘程苦心して居る様に見えることである。是は從來我國に於ける幼稚園が多きは舊式の範圍を脱すること遠らざるに對しては一段の進歩である。と云はなければならぬ。即ち幼兒の遊戲其物を主體として之を多方に扱ひ其興味を充分に發展しやうと云ふのであるから、手技中心の舊式に比しては大なる相違で幼兒の幸福は之が爲めに非常に進歩する譯である。我國にも近時此主義が漸次輸入せられて現在私行廣島女學校附屬幼稚園では盛に之を實行して居るし近くは女子大學の幼稚園でも此主義で遣つて居るさうである。併し此主義に缺點があることを免れない。殊に此主義を實行して居る人の考は吾人の着眼點と全然相容れないのは遺憾である。吾人は其遊戲主體たる處に此主義の進歩を認めて居るのに此主義の人は却つて其人爲的にして價値少なからず統合主義を以て無上の旗幟として居る。是は大に研究を要する所であらう詮ずる所我國の從來の幼稚園は毫も幼稚園の本領を發揮して居らず。現在の幼稚園も多くは五里霧中に彷徨して居る機に見える。そこで將來の幼稚園は

如何にと云ふに吾人は徹頭徹尾幼兒の遊戲を指導すると云ふことを以て其本領として活動しなればなるまいと思ふ。換言すれば幼稚園は即ち幼兒遊戲場、幼兒教育者は即ち遊戲指導者と云ふ意味に於て活動しなければなるまいと思ふのである。何故幼稚園は遊戲を本領としなければならぬかと云ふに一口に云へば幼兒の活動は遊戲の外に何物もないからである。幼兒は食つて寝て遊ぶ動物である。云ふより外には何等の意味をも付け加へることは出来ぬ。従つて之れ以上強いて付け加へられたる課業は畢竟無意味のものである。此無意味の者を付け加へて驕い處で何の効があらうか。人に因ると幼稚園は遊戲を利用して智徳を養ふ所であると云ふ。成程、尤も至極の道理ではあるが是は程度問題である。兎角利用など云ふと極端に走り易いので困る。フレイベル自身も此弊に陥つて遂に利用を通り越して悪用に迄至つて居る位であるから幼兒教育者は餘程注意して善良なる遊戲に因つて幼兒を感化誘導することを専らとして決して遊戲の上に一種の重荷を添加しない

様に氣を付けねばならないのである。

四、幼稚園に對する非難
從來幼稚園に對する非難と云ふものは可なり

澤山あつたことを記憶する。今其中の重要なものを上げて吾人の愚見を開陳して見様、

(一)幼稚園は幼児を早熟にする傾向ありと云ふ非難此攻撃に對しては吾人は先づ冒頭に「從來」の二字

と冠してはしいと思ふ。事實從來の幼稚園は幼児を早熟にして居つたに相違ない。否現在も多くの

幼稚園では矢張り日々幼児を早熟せしむることに骨折つて居るかも知れない。何故と云ふに從來の

幼稚園は實際或意味に於ては學校であつたからである。保姆は或細工を教へ或話をして専ら技能と

智識とを授與することに努めたからである、其結果は彼等幼児を早熟せしめたに相違ない此弊風は

今日でも處々に行はれて居つて中々抜き難いものになつて居る。殊に此弊風を改め難からしむる原

因が今日でも二つある。故に此二つの原因を艾除せざる限りは先づ當分の中は幼稚園をして此弊風

より脱せしむることが六ヶしいだらうと思ふ。

二つの原因とは何であるかと云ふと第一は現在保姆の技量が足りない、殊に幼児教育者としての専門的教育術が不足なことである。勿論多くの保姆の先生の中には立派な方が幾らもある。皆何れも普通學の力に於ては申分はないのである。又其教育の技術も舊式の保育法から考へたら皆夫れ々々専門の技量を有せらるゝに違ひない。成程恩物の工夫は中々達者に遣られるに相違ない。唱歌も達者であらう動作遊戲も數々御存じであらう、然も是等の智識技能を以て教授することなく彼等幼児を教育する方法は果して能く研究せられてあるか如何。是點が吾人が現在の幼児教育者に對して不足を感じる所である。一體人に事物を教授するに因つて人を教育し様と云ふのは其教授す可き智識技能にあれば易々たるものであるが、何物をも目立つて教授することなくして然も彼等を教育し様と云ふのは決して容易の業ではない。幼児教育は前者でなくて後者であるのに從來の幼稚園は主として前者の方法を取り來つたので、現在の多くの保姆は教へて教育するの法を知つて居るが

教へずして教育するの法は之を知らぬものが多い故に將來の幼稚園をして妄りに教ふることなからしめんには先づ現在の保育方法其物を改良しなければならず。同時に現在の保姆をして此點に修養を積ましめなければならぬ。是が中々の困難である。今一つの理由は父兄の誤解である。或父兄は未だに斯う云ふことを考へて居る即ち幼稚園も教育である以上は幼児は幼稚園に出で、何物か得て來なければならぬ。と云ふのである。そして子供が幼稚園から歸つて來れば直に今日は何を教はつたかと聞く、子供は何物かを提供しなければ具合が悪い、そこで幼稚園では之に應じて何物か御土産になるものを教へ様と云ふ傾きがある。殊に私立の幼稚園などでは營業上是非なくも日々何等かの細工物を持たして歸すと云ふ位で此弊害も當分は改めること頗る難いのであらうと思ふ。兎に角幼児早熟の弊害は從來の幼稚園には確かにあつたので將來大に注意しなければならぬのであるが併し根本の責任は本邦人の一般が負擔しなければならぬのである、何故と云ふに邦人は一般に

子供の早熟したのを喜び大人らしく振舞ふのを褒める傾があるから會々此弱點が幼稚園に發露したるに過ぎないからである。
 (二)幼稚園出身の兒童は遊び半分に物事をすると云ふ非難 此非難も從來は確かにあつた弊害であることを白狀しなければならぬ。現在も此弊害は中々盛んであると思ふ。一般に直接家庭より出て來て就學した兒童は頗る眞面目なものである。何故幼稚園出身者が遊び半分であるかと云ふには幼稚園の教育法が然らしめるので誠に是非ないこと、云はなければならぬ。誰れでも幼稚園を參觀して御覽なさい。遊びをして居るのか、稽古をして居るのか一寸判斷に困るものである。事實幼稚園の仕事は遊び半分に稽古半分である。或意味に於ては遊びでもあり、稽古でもあると云ひ得る様な極めて曖昧なことをして居るのが今の幼稚園である。殊に幼稚園の最上級即ち最年長の幼兒を集めた一團は何處の幼稚園へ行つて見ても机の並べ方からして保姆の態度迄が宛然たる學校である。そして其仕事は手遊びを遣つて居る。是では幼兒

が稽古を遊び半分にするのは當り前の事と云はねばならぬ。併し是は幼稚園の本領ではない。幼稚園の本領は前節に於て述べたる如く遊戲である。既に遊戲が本領である以上は課業的稽古的の分子は幼稚園から除くのが適當であると思ふ否除かなければなるまいと思ふが併し或一部の人は之に反對するので何うも思はしい結果が上らない。其反對と云ふのは斯うである。凡そ教育の進歩と云ふものは不斷であり斜面的である。決して或時期を劃して飛び上るものではない。幼兒の最初の遊戲は漸次進歩して課業的にならなければならぬが夫れも決して小學校に出席する前後一日の間に於て格段に變化す可きでない。幼稚園の終り頃に於ては最早稽古的に何かしても宜しい筈である、と斯う云ふのである。此議論の前半は誠に尤もな議論であるが後半は全然誤つて居ると云はねばならぬと云ふ譯は若し果して此議論通りにするとすれば現在の小學校令施行規則は之を改正して幼稚園が今少し小學校一年級の教科目を蠶養してよい筈であるし。同時に小學校の一年級は大に幼稚園的に遣

つて呉れなければならぬのである。之をせずして唯幼稚園の終り丈けが學校の様な學校でない様な何とも形容の出来ない鶴的な事をするのは徒らに此制度の美を害するものであるのに注意しなければならぬ。

吾人は思ふ我國の制度が幼稚園と小學校とを全然區別して相侵す所なからしめたのは大なる美點である。幼稚園は徒らに他の仕事を蠶養せんよりは宜しく自家の特點を大に發揮す可きである。と斯ふ思ふのである。以上二つの缺點は實際あることで何とも辯解の仕様のないものであるが是れは充分改良することが出來様と思ふ。尙此外に幼稚園に對する非難は計へ上ると幾つも輩出して來る箇條書に列擧して見ると

- 一、幼稚園出身者は人に押れ易し。
- 一、幼稚園出身者は教師を以て友達と心得て居る。
- 三、幼稚園出身者は見聞狹し。
- 四、幼稚園出身者は慾に教材を半ば知り居る。と多き爲めに勉學熱心ならず。

五、幼稚園出身者は不從順なり。

などが重要なものである。が何れも現在の保育方法を改良することに因つて改善の見込が充分に存するものであるし、殊に第一及第五の兩項は保育者其人を得さへすれば此の憂もない筈である。

五、小學校との連絡は如何にす可きか

幼稚園が普通の教育機關であるとしたならば夫と小學校とは如何に連絡す可きかといふ疑問を生ずるが是は然したる問題でない。吾人は別段考慮する必要を認めないのである。何故と云ふに幼稚園は其形に於てこそ學校に似て居る様であるけれども其性質は全然家庭の中に屬す可きもので幼児の生活状態より考へても強ひて家庭と異らしむ可き必要を認めないのであるから其爲る仕事も決して學校の範圍を冒したり其領分を蠶食する様なことは有る可きでない。従つて何も樽俎折衝を重ねて兩者の連絡調和を人為的に規定しなればならぬと云ふ込み入つた問題ではないのである。或は學校で教へらる可き唱歌等を幼稚園出身者が既に知つて居ると云ふ様な事があつて教授に興味がない

いと云つて不平を云ふ人もあるが、こんな詰らぬ攻撃は採るに足らぬ事で何も知つて居るものを強ひて教へなければならぬ譯でもないから斯る場合にはドシ／＼他の教材を撰んだら濟むことである又或人は訓練上に於ける連絡を規定する必要があると云ふが是も規定する必要よりは家庭と學校とに於ける訓練上に如何なる相違があるかを觀察すれば幼稚園訓練の任務及範圍は自ら解決せられる筈で殊更に幼稚園と學校との間に調和を缺く様な憂はない筈である要するに幼稚園と小學校との連絡は決して心配する程の問題を生ず可きものではない。

以上は幼稚園に關する刻下重要な問題二三に就て聊か愚見を述べたのであるが尙折を見て他の問題にも及はふと思ふ。希くは世上博雅の君子批正を吝む勿からんことを。(完)



松平定信の半面

雨 峯 生

1 定信の系圖 昔から將門將を出し、相門相を出す、頼光を始めとして、頼信、頼義や、八幡太郎義家、鎮西八郎爲朝や頼朝義經に至るまで、えらい武將を出して居る。又藤原氏のやうな政治家の家柄では、先祖の鎌足を始として、不比等、良房、基經より道長に至るまで、なか／＼えらひ宰相を出して居る。して見れば、徳川中興の祖吉宗を祖父に持ち、文學に秀ひたる田安宗武を父としたる松平定信が彼のやうに傑出したのも敢へて怪しむには足りない。定信は實に吉宗公のお孫で、宗武卿の三男であつたのである。

2 定信の誕生 龍は生れて昇天の氣あり、虎は生れて食牛の氣ありとか昔からいひ傳へてある。徳川時代の英傑なる定信も既に幼時嶄然として頭角をあらはし、普通の兒童と異なつたところがあつたやうである。さて定信が始めて呱呱の聲をあげたのは、寶曆八年(紀元二四一八)の十二月廿七日であつて、生れた所は田安の邸である。幼名は賢丸といつて、矢張り田安の邸で保育を受けたのである。幼年の間は生れつき虚弱であつて、度々病み煩ひをされたのであるが、醫者の盡力や灸藥のお蔭で大きくなられたといつて宜しい。六歳の時には殊に大病を病まれたが、鳥朔庵といふ者の治療で漸く命をお救ひ申したといふとである。

3 將軍の寵愛 賢丸が五歳の時、田安の邸宅が火事で焼た。將軍から御上意があつたので、父母兄弟と共に、取り敢へず將軍の本城へ移られた。そして暫時御滞在して居る其の中に、時の將軍家十代家治公の御氣に入り、非常に寵愛を蒙つた。それだから宗武卿をはじめ外の者は皆五六日たちて、假りに徳川宮内卿宗尹の一橋の邸に移られたけれども、獨り賢丸ばかりは、本城に遣り留まつて、將軍の小さき愛者となつて、其の膝下に戯れて居つた。將軍は、賢丸が身軀は虚弱であるが、非常に英氣のあるのを愛で、たびたび此の兒を

そ我が家（いへ）を興（おこ）すだらうといはれたといふとである
して見れば賢丸（けんまる）が常人（じやうにん）と異（こと）つて居（ゐ）つたのは、かや
うに幼少（ちようせう）の時（とき）からである。

4 定信（さだのぶ）の勉學（べんがく） 賢丸（けんまる）がはじめて假字（かじ）を習（なら）ひ、また
はじめて孝經（かうけい）を讀（よ）みならつたのは七歳（さい）の時（とき）である
學問（がくもん）の先生（せんせい）は大塚（おほづか）孝綽（かうてつ）といふ田安（でんあん）家の儒臣（にうしん）であつ
た。孝經（かうけい）の始（はじ）に夫（そ）孝（かう）徳（とく）之本（もと）也（なり）とあるを讀（よ）むに當（あた）つ
て、徳（とく）とは何（なん）の事（こと）かといふ質問（しつもん）を發（は）せられたの
で、先生（せんせい）の大塚（おほづか）は深（ふか）く驚（おどろ）いて、是（こゝ）尋常（じんじやう）の子供（こども）の氣
がつくべき事柄（ことがら）でない。誠に末頼（すえたの）もしい若君（わかぎみ）であ
るといふに申（まを）したとやら。十歳（じゆさい）の時分（じゆぶん）からどう
かして我が日本（にほん）は勿論（もちろん）、唐土（からど）にも自（みづか）分の名（な）を知ら
れるやうな、えらい事（こと）をしたいといふ志（し）を立て
れた。讀（よ）み習（な）つた孝經（かうけい）の中に、身（み）を立て、道（みち）を行（な）
ひ、名（な）を後世（こうせい）に揚（た）げんとあるが、どうしたらば身（み）を
立て道（みち）を行（な）ふ事（こと）が出來るか、それがよく分（わ）らない
ので、先生（せんせい）の大塚（おほづか）に御尋ね（ごけん）になつた。大塚（おほづか）は答（こた）へ
て申（まを）しますには、よい處（ところ）にお氣（き）がつかれまして
身（み）を立て道（みち）を行（な）ふには、學問（がくもん）を勉（つと）め勵（む）むより、外（ほか）
に手段（しゆだん）も方法（はうほう）もない。但（ただ）し學問（がくもん）といふものは兎角（とくかく）

世間（せけん）の事情（じやうじやう）に疎（うと）くなり勝（か）ちものであるから、つと
めて下情（かじやう）に通（つう）ずる様に御心掛（ごこころづか）けなさるが肝要（かんよう）であ
ると申しあげた。立居（たちゐ）ふるまひが自（みづか）つと他（た）の兒童（こども）
と異（こと）なつたといふのも、志（し）が堅（か）く立（た）つたからで、
又諸役人（しよやくにん）の詰所（つめじよ）などへ行（い）き、様々（さまざま）の物語（ものがたり）などを心
をといめて聞（き）かれたといふのも、つまり下情（かじやう）を知
つておいて、後年（こうねん）政（せい）を執（と）る時の助（たすけ）にしやう、そ
れに公子（こうし）の時（とき）でなければ、かやうな事（こと）を聞（き）くとは
出來（き）ないと思（おも）はれたからである。公（こう）が非凡（ひふはん）の性質（せいかう）
を持つて居（ゐ）つたのは勿論（もちろん）であるが、又先生（せんせい）の大塚（おほづか）
の盡力（じんりき）も亦没（また）すべからざるものがある。後年（こうねん）大塚（おほづか）
がなくなつてから、定信（さだのぶ）が自ら碑銘（ひめい）を御造（ごぞう）りにな
つたといふのも、無理（むり）のないと思（おも）はれる。
5 定信（さだのぶ）の慈悲心（じひしん） こゝに定信（さだのぶ）の幼時（ようじ）に、人（ひと）を思（おも）ひ
やるといふ心（こゝろ）があつたといふ逸話（えいわ）がのこつてゐ
る。それは十二歳（じふにさい）の時（とき）であつた、麻布（あふ）鳥居坂（とりいざか）の旗
本の士（し）、戸川（とがわ）内膳（うちだん）の家（いへ）から火事（かじ）がで、其（そ）の邊（へん）の
町家（ちやが）が大（だい）へんやけて、焼（や）け死（し）んだものもあつた
が、其（そ）の時（とき）誰（たれ）が作（つく）つたか分（わ）らないが、こんな落首（らくしゆ）
をしたものがあつた。

この火事は人の命を鳥居坂、これより上の各は内膳、一寸面白くよんであるので、皆々面白がつて、口巧者によんだなど、批評し合つた。其の時定信は傍に居つて、私ならさうはよまないと思つた。やつたので、奥醫者の某といふものが、それでは何と御詠みになりますか、と繰り返し強ひて尋ねたので、

この火事は人の命を鳥居坂、怪我の事なり戸川内膳、かうよむと御答へになつたといふ事である。

小さな事であるけれども、しかし歌の意味はまるで反對になつて、怪我過に出た火事であるから罪咎はないといふ事になつてしまつた。これでもつて、人の上に立つ事の出事の度量がお有りになると、いづれも皆未頼もしく思つた。

6 定信の詩作並に最初の著作 定信は既に志が立つた、學問修業に身を入れた。行は既に普通の兒童と異つて居る。されば學問に於ても其の造詣する所は決して少くはなかつたやうである。年が十三歳になつた時には、自教鑑といふ書物を綴つて自己の行を正し、自己の反省の料に供しやうと企

てられた。中にかいてある事柄を見るとよく儒教が消化して居つて、之を自己修養の規範にされたやうに思はれる。今の兒童の梯子をかけても及ぶところでないと思はれる。父君の宗武卿は之を見て大に喜ばれ一部の史記を褒美として定信に取らせ、ますます學問奨励をせられたさうである。其の頃つくられたといふ雨後の詩に

虹晴清夕氣

雨厭散秋陰

流水琴聲響

遠山黛色深

といふのがある。また七夕の詩に

七夕雲霧散

織女渡銀河

秋風鵲橋上

今夜莫揚波

なんといふのがある。菅公が十一歳の時に月輝如晴雲云々梅花の詩を作られたのは歴史上有名な話で、又菅公の夙成早熟を驚嘆する譯であるが、定信の詩作も實に夙成早熟、感歎に價すると思ふ生長せられてから詩は作られなかつた。此の頃晝も夜も少しも暇があれば弓術を好んで練習せられたやうである。猿樂などとは習はれたけれど、一年たない内にやめられた。

7 讀書拍案 ある日後漢書を讀み、陳蕃が慨然として、天下を清むるの志ありといふ所に至り、感歎の餘りはたと膝を打たれたといふ事だ、それは定信も以前よりかく志された事であるから、古今隔はあれども、東西地を異にすれども、恰も割符を合せたやうなるを感じられたのである。此の時分徳川氏の天下は、まだ陳蕃の出た後漢の桓帝靈帝などの時のやうに、亂れては居なかつたが、しかし泰平年既に久しくあつて、殊に田沼重次のようなわるい人物が出たため、社會は大分腐敗し始めて居た。この時に當つて定信のやうな抱負の大きい人が出たのは實に必要があつたのであるし、又徳川氏のためにも、天下の人民の爲にも幸福であつたのである。

8 定信の修養 定信は生れつき氣が短く、癩癩が非常に強くあつて、聯の事に腹を立てられしかば、師の大塚近侍の水野爲長等かはるがはる之を諫めて、性急と癩癩は度量が狭いのに原因します昔から事を成した人で、度量の狭かつた人はない。郎君の如き人の上に立つ御身では是非とも度量が

廣くなくてはならぬ。性急と癩癩とは立身行道の仇である。之を抑へて度量を廣くするが己に克つといふものであると申したから、定信は深く其の言葉に感心し、深く自ら戒め、工夫をこらして之を折制せられたから、十八歳の時分には、性質ががらりと變つてしまつて、寛仁大度うるはしい徳を備へる所の人となられた。

10 定信の孝悌 御父君宗武卿は、性質もしつかりして居られるし、學問もあられた方である、自分を將軍家の輔佐を以て自ら任じ、直言して時事を論ぜられたことから、將軍の御旨にさはり、一時他に御預になられたともある御方である。十分の器量は持て居られたのであるが、つまり當世には用ひられなかつた方である。それ故に我が子たる定信が器量拔群で、將來非常に有望であるから、如何に其の前途の發展を樂しんで待つて居られたでわらうか。定信が十三の歳に自教鑑といふ小冊子を綴つたのを見て、我が子ながらも實に群兒に異なるところあるを御賞美あつて、一部の史記を賜つた其の喜はどれ程であつたらうか。想像するに

餘りがある。定信が如何に發展するか其の發展を見ずして十四歳の時に御父君はなくなられた。定信のなげきはどれ程であつたらう。親に仕へて非常に睦まじく、世の常と異なつて居たのであるから想像するに難くはない。これからは御兄さんの大藏卿治察に仕へて、能く敬と悌をつくされたといふのである。白川の松平家にゆかれてからは、心をつくして、養父母を慰め、孝順の道をつくした。たとへば、毎朝御用達といふ役人を、西城の下御屋敷から、八丁堀の御屋敷まで、やつて、養父母の御機嫌を何はせて、御用達が戻れば、次の間に出て謹んで御様子を御尋ねになります。とりわけ、養父定邦が中風を病まれてからは、醫者と薬よく心を盡され、いさゝかも看護のなほざりはなかつた。そして少しでも粗忽があつては不孝の大なるものと恐れて居られた。定邦の病氣がはいなほつて、御同道にて登城せられたときは定信は其の手を執りて扶けながら通られた。又いつの年であつたか、例のやうに扶けて登城せられたのに城内のどこの場所であつたか、定邦は草履

がないので前後見合せられた時、定信は新しい草履を懷より取り出して進められたといふまでである。定邦がなくなられて、御養母青松院、寡居してさびしければ、御慰に三味線囃などする者を召しよせ、一時の興を催し給ふ時、定信が若し儼然として、其の側に坐して居られては、御養母をはじめ、一座の者が皆、氣遣に思つて、御面白かられぬものだから、定信はつとめて、御自身人形つかふ眞似などをして、御心を慰められたといふのである。されども、御自分が御好なら兎に角、かやうな事は此の時の外はととなかつたといふのである。とても今時の若い人達の氣がつくとではな

いと思はれます。(未完)

● 自然的運動

餘り體育に重きを置き過ぎると腦力の發達を妨げる健康な心では健康な体に宿るといふが、体力と腦力とは全然一致するものではない、何でも自然に反するものは好くない、早い話が牛乳である、朝夕搾り取ると乳牛は苦しいから体が弱わる、其の牛乳には細菌がある、これは牛に取つて不自然であるから、運動は人爲的よりも自然的の方が好い (三宅雄次郎)

育兒の經驗

某夫人

子供の姿勢に注意する事
姿勢と身体しんたいの健康けんかうと關係けんけいの大きい事は誰たれも知らぬものはな。故に學校がくかうなどではしきりに其の矯正けうせいに腐心ふしんして居りますが、家庭に於て此處に意を用ひて居られる主婦しゆふが割合少くあるまいかと憂へます。巍然ぎせんとして雲をつくが如き老松も其始めはふめば折れなん二葉の優やさにやさしかりしもの布衣ふいより身を起して帝位ていゐに上りしナポレオンでも、北米のワシントンでも皆始めは母の懷ふところに抱かれて其の乳をさぐりしもの。大木たり豪傑ごうてつとして万人に仰がるゝに至りし其の初めは之を養育する人の保育の仕方しかたが其の當を得たる爲ではありますまいか。殊に其の呱呱の聲を上ぐるの時が最も大切な根を作るべき時ではありますまいか。此時に幼兒の心身の發達に意を用ふる事を怠りて、將來不治の不具者となす事は世間其例少くありますまい。わけ

て姿勢の如きは學校より寧ろ家庭が注意を拂ふべきものではありますまいか、登校する頃の子供の身体は已に大方きまりのつきかけし頃なほすとも中に六ヶしい。其の以前が最も多大の注意を要する。して見れば子供の姿勢は母の尤も留意して其の兒將來の發展を圖るべき事柄であると信じます。世の男子より殊に女子に多いのは脊骨の屈曲であります。少し年頃の娘などによくこの屈曲せし者が多い様であり。前年私がある學校で、高等四年の女生徒を二回許り受持ちました時殆んど屈曲しない生徒はない位で、いろいろやかましく申しました事が御座いしましたが、之れは天性にもよるかも知れませぬが、多くは家庭に於て子女教育の大任を負へるものが、教育の思想の缺乏と注意の不足とに原因することが多いと思ひます。又一つには稻の例の如く、よく熟したる謂はゆる氣の練れた人は腰が低いとか申しますのを、極度に應用した反動ではなからうかと思はれます。即ち熟達した人はよく謙遜に人をそらさぬ腰も低い、

辭儀もよく出来る。禮儀のみに止らず一寸人に物言ふ時も腰を少し屈する脊を屈するといふ風で一寸逢つても腰を低めると言ふのが慣はしとなつて自然に女などは深い意味も何も知らないで、只矢鱈に身体を前方に屈するといふ風になつたのであるまいか。私共の狭い経験で申しますと、學校などに出て居る人と一家に退隱して専念家政を司る主婦とを比較するに、前者の姿勢が遙によろしい。これは種々の原因にもよりませうが、即ち日本家の構造から仕事をする時の如き殊に裁縫などは、大に關係するであらうと思はれますが、一つは常に家にあつて腰を低く腰を低くする害ではなからうかと思はれます。一寸おばさん赤様をオ、お可愛ひと取り上る其娘の胸をそらして起立した姿勢よりも少し前方に屈した方が何となく女らしい、奥床しひ、優やさしいと言ふ一種の感情より自然と何事も此筆法で行く故でありますまいか。さすれば實に大きな問題で社會改良とか何とか云ふ方面の事になるかも知れませぬが、私はどうでも改良しなければならぬ事ではないかし

らと思ふのであります。右の如き家庭に育つ子の姿勢の稍悪しきは理の當然と存せられますが、どうかして其を矯正したいものだと常々思ふて居りまして、私の家でも最も注意いたして居ります。最初長男の八歳になるのは天性薄弱で胸部が非常に落込んだ様な窪みのある胸廓の狭い子で御座いました。ソコデ醫者の注意もありましたし衣服の紐に氣をつけ少し可笑くつても帶を下の方にめめて胸部を壓迫しないように、すべてに氣をつけました。今日ではモウ大抵普通の身体になりましたが、どうかすると讀書する時機の方に屈する、食卓に倚りかゝるといふ風があります。ソコデ私は常にソレ姿勢ヤレ姿勢と見付かり次第申しやすが大分自分でも氣をつけるようになりました。それからさうやかましく言ふばかりでもいけないうと存じましてお湯の時などを利用して生理の話をきかせる。之れが大きな効があつたかしらと思はれます。かつて入浴中彼は胸をはつてアバラ骨がゴツゴツ出て居るのを指さして母さんこれは何と質問しました。コ、ゾ待

受けたりで『これがねソレお前がチヨイチヨイ聞
く顔の色の青白い。やせた肺病の人があるだらう
アノ肺病といふのは此處を病んで居るのである
と言ひ聞かせると彼はソーカと引込んで居ぬ、
肺病になれば死ぬかと聞く「ア、死にますとも
ソレは實に苦しいやな病氣だよ、ドーして其の
病氣になるかと聞く「ア、ソレ平素姿勢に氣をつ
けなさいとは、コ、の事だよネ、此胸に骨がある
でせう其處には肺といふ大事な道具がある
平素身体を前方に屈すると其の肺を壓へつける肺
を壓へつけると肺が充分に働かぬ。其の働を充分
にする事が出来ない肺が弱くなる。肺が弱くな
れば身体が弱くなる。身体が弱くなれば肺病にも
胃病にもかゝり易くなる。ダカラフダン姿勢に氣
をおつけなさい。氣をおつけなさいと言ふのです
ネ分つたかといふ風に向つて常に来るべ
き好材料を捕へては姿勢に氣をつけて居ます。
又チヨイチヨイ老人の脊の屈曲せる人を見る時に
子供はすぐあれはどうしたのと聞く「ア、あれも
少い時から身体を前方に屈し姿勢に氣をつけた

かつた故なのと言ひ聞かせ。又濫呼吸などやらせ
て成丈胸部を張る練習をいたさせて居ります。
私共のよーに大勢の子供ですと長男にソレ姿勢と
申しますと他のなみ居る子供は皆一時に胸をウン
と張つて自満氣な顔をして居ます、それからあらぬ
か他の小供は皆姿勢がよいようで御座います。
又女子の姿勢の一般にわるいのは、前中し述べま
したような事もありませうし、又裁縫などするの
が大變影響はしまいかと思はれます此等は子女
教育の任に當る人の最も研究を要する事柄かと思
ひます。

病状を知らざる利益

米國費府の醫學雜誌は曰く醫學上の智識近來一般に發達した
るより醫師は患者に對して病状を包まず語るに多くなりたる
も患者が自己の病状及び其療法を知るは大抵の場合に於て有
害にして歐米の醫師が今尙處方箋に羅典語を用ふる重なる理
由は患者をして成る可く藥の種類を知らしめざるを可とする
が爲にして例へ患者は多少の智識を有するも醫師の望むが如
く充分なる療法を知らる者に非ず寧ろ飽まで醫師に信頼する
を患者の爲には有益なりとす

再び幼稚園の共同遊戯に

就いて

和田 實

幼稚園の共同遊戯即ち所謂唱歌遊戯に就いて吾人は多少の意見を前號に掲載した所が或會員の所から左の手簡が来た。吾人の言論が少しでも地方に於ける會員諸君の御参考になつたと思へば甚だ満足であるが、夫れが爲めに一層の疑問を生ぜしめ往く所の方針に迷ふ様なことが出来たとすれば其責は誠に輕からぬことである。左の手簡をよこされた方は幸に吾人と略同意見の人であるから未だ是位の質問で疑問は解決されるけれど、或は是以上の疑問や異見があつて吾人の所見を疑がつて居られる方があるかも知れぬと思ふから今茲に多少反復する所があるのも厭はず今一度吾人の意見を吐露し様と思ふのである。寄せられた手紙と云ふのは左の通りです。氏名は都合があつて暫く藏して置きます。

先生の仰せられました如く幼児は飾つて眺めるものでなく生き

て居てしかも我儘者で始終何事かをして居る動物で妄りに規制すべきものでない。それを當市の幼稚園では全く反對に玩弄視して外觀を美ならしめんが爲めに強いて規律を事としてゐるやうでして凡てありとあらゆる唱歌に悉く動作をつけて仲には全く大人の考へで幼児には一向にわけのわからぬ事をさせて居るやうな一般の風を見うけました。私はどうも感服致ませんでした爲め此の度の運動會にも少々注意致しましてやたらに動作をつけませす、唱歌遊戯中にも服あげボートなどは自然活動にちかて平素幼児も大變喜んで居ました爲め擇んでいたしました。それから塙の雀で庭園を隨意にばす事も致しましたら小山の中などに殊更いつて寝るものもありまして大變子供も喜びました。服もボートも一列なんかにならせないで勝手處で元氣にさせました。所が自分では他と比較批評も出来ませぬが或る人からはたしかに一進歩であるといはれました。先生私は先生の御話を見ましてまだ自分の致し方に缺點のあつた事を深くさとりました。來年までには大に研究いたしてこんどそはと今から楽しんで居ます同時にあれやこれや考へます。と唱歌遊戯をさせます範圍が私は知れなくなつてしまひましたんだか唱歌遊戯について考へがまとまらなくなりましたから御面倒作らこゝにつまらぬ事を御伺ひ申上ます。先生の仰せられました團體的共同遊戯の限度で御座います(窮風な範圍を脱し閉ぢられた遊嬉室から出て自由な多方面の發達を心掛くべきである)これによりますと御校幼稚園でのあの内遊の様なものには必要がないとおげし召でせうか内遊ではいつも唱歌遊戯を致

ますがあんな事は全く内遊として殊更致す必要はないもので御座いませうか只今までは何れの幼稚園でもしてゐない處はありませぬがこれはほんとにどうも自分で限度がわからぬので御座います。私の處では只今まではかう致して居りますが如何で御座いませうとぞ、御遠慮なく厳く批評を願います。遊嬉室では朝の會集の時おはようの挨拶後の二三の唱歌遊嬉を致します其の外には内遊として殊更致しませぬ一週二三回時を見てウアイオリンで庭園で各組連合で唱歌をしたり陣屋取り旗送り兎事バスケットボール猫と鼠探り物などして競争遊嬉のやさしいものなど個人競争でなくさせます其の間に少しづつ唱歌遊嬉を入れて樂器にあはせて又次にうつるやうにいたして居ますけれども時には列をさせます事もありますが多くは其のまゝ此處で例へば桃だらうさんなんかをうたはせてゐますが子供は割合によろこんで遊んでくれます。先生に見ていたゞきまして御高評を願つたらといつも思ひますのです。團體遊嬉はこの外に宜しい方法が御座いませうかこれ位は幼稚園の團體共同遊嬉の範圍に入れてよろしいでせうか。先生御話が少し横に入りましたが、遊嬉室でさせなくとも兎に角室内で唱歌などさせます時に物によりましては、たゞ歌のみでは興味が少く御座いますし又意味の了解し難い處など御座います爲めに、幼兒自身でいろ／＼動作をこしらへましたりこちらから適當の事をさせて居ますが、これで出来だしますと遊嬉室の中でなくとも同じになつてまゐりますと存じますが、この動作といふものにはどんな考をもつて居ましたら宜しいでせうか(たゞ唱歌遊嬉

の外延を縮少す)と申しますのは、外見をくよする爲めに遊嬉室で美麗に並ぶ一つの規律のもとにやるのをとめ、唱歌などの、際動作をわかり易く、幼兒の自然に發する動作につけて共にたのしく遊びつたう位で、殊更に内遊として正しく強い列など作らせておとなしくさせやうとするのを止める位で宜しいでせうか。當園前主任の人の話では何の歌にも悉く動作がついて居まして始めから終りまでみんな動作ばかりでして、動作のつけ方がないといふ處などへは拍子又は歩行を入れて少しもじつとして歌をうたはせるといふ事はなかつたそうです。私はこれにはどうも賛成致して居ませんが如何で御座いませう。外延縮少の範圍を考へますともう頭がむちやくちやになつてしまつて困ります私はたしかに唱歌遊嬉には賛成致しませんが唱歌遊嬉について人にきかれました時にしかとした考へが御座いませんではと存じまゐつてくだらぬ事を長々と書き綴りまして先生の御目をわづらはしました。近ければ先生の御話も伺ひますと思ひますとなんだかなさげなくなりました。先生私の遊も何の氣もつかず只今までうか／＼と致してゐました。どうぞ御暇の御あり遊ばしました節何とぞ先生の御話を手紙でもつて何はせていたゞきたう御座います。それから遊嬉具のよろしい物が御座いましたらどうぞ價と名と賣店とを御教へ下さいませ。此の雜誌で一才拜見致しましたが明治獨樂は如何で御座いませう。實物を見ませぬから判斷がたちませぬので困つてゐます。それから先生ブランコか何かあんな体力的な遊嬉に用ゐます遊嬉具で備付によろしいものは何か御座いませうか。腰掛ブランコは

いかで御座いませう。當市はつまりませぬから玩具屋にでもこれといふ玩具は一つも御座いせん。何か御氣おつきの物がございましたら賣店をどうぞ御知らせを願上ます。誠にそれ入ました御願で御座います。

惟ふに會員諸君の中には是と同様の感を抱かる方々が他にも決してないことはあるまいと思ふ。打ち見る所、疑問の要點は幼兒教育上に於ける所謂共同遊戲の價値と其位置、及び唱歌に伴ふ所作の必要なる限度如何と云ふ所にあると思ふ。そこで先づ第一に共同遊戲に就いて述べて見やう。

元來共同と云ふ言葉は單獨と云ふ言葉に對するもので幼兒遊戲の形式に屬する區別であつて遊戲を分類する上の言葉としては適當なものではない。殊に從來幼稚園に於て用ゐて來た所の團隊的唱歌的、律動的、遊戲式を以て共同遊戲と稱へて居るのは極めて不適當なる言辭であると言はねばならぬ。何故と云ふに共同と云ふことは何も唱歌遊戲に限つたことはなく隨意に砂場で遊んで居るときでも鬼ごつこや驅けつこをして居る時でも自然現はれることで寧ろ共同と云ふことは唱歌遊戲以外のの方に却つて多量に見出される位であるか

らである。

然らば一体此唱歌遊戲は如何なる必要があつて行はれる様になつたのであるかと云ふに一方は無論幼兒の共同的遊戲動向に則つたには違ひないが一方は確かに多勢の幼兒を管理し易く遊ばせ様と云ふ教師自身の都合から來て居るのである。若し是れが教師や管理者の都合など、云ふことが全く無くて全然幼兒の自然的な要求にのみ則つて工夫されたものならば、團隊の人數は各遊戲に因つて自づから差違を呈するが當然であり、且つ一組の人數は妄りに數十の多數に昇る可きものではない。試みに幼兒の自然に行つて居る共同作業や、鬼事や、子を取るゝなどを見ても判る話である。然るに幼稚園の遊戲と云ふものは其人數が既に幼兒の自然に要求するものよりは遙かに多數である。そして遊戲の結果に於て各幼兒の個人的に得る所の遊戲量と云ふものは彼自然に行はるゝ共同遊戲に比するときは遙かに劣位にある。是等の諸點を總合して見れば現在の幼稚園に行うて居る共同遊戲は幼兒本來の要求に應じたものと云ふよりは寧ろ一

方（はう）に幼児（ようじ）の要求（ようきう）を顧（か）みると共に他方（たはう）には看護者（かんごしや）の
 便宜（べんぎ）の爲（ため）に工夫（くふう）せられたものであると云（い）つて決（けつ）
 して不當（ふたう）でない。殊（こと）にフレーベルが母（はは）の遊戯（ゆうぎ）を工（く）
 夫（ふう）した其（その）もとは雨（あま）降り（り）の際（さい）に於（お）ける消閑（しょうかん）の遊戯（ゆうぎ）よ
 り始（はじ）まつたと云（い）ふに至（いた）つては吾（われ）人の此（この）見解（けんかい）は決（けつ）し
 て大（だい）なる過（あやまち）はあるまいと思（おも）ふ。斯（かく）くの如（ごと）く幼稚園（ようちえん）
 の所謂（いわゆる）共同（きうどう）遊戯（ゆうぎ）は一方（いっぽう）教師（きょうし）の都合（ごうご）上（じやう）工夫（くふう）されたも
 のとすれば其（その）が或（ある）點（てん）に於（お）て多（おほ）量（りやう）なりとも幼（お）児（じ）を無（む）
 理（り）押（お）し付（つ）けをして居（ゐ）る所（ところ）があるのは止（とど）むを得（え）ぬ次（つぎ）
 第（だい）である。從（したが）つて幼（お）児（じ）の之（これ）に對（たい）する興（き）味（み）と云（い）ふも
 のを氣（き）を付（つ）けて見（み）て居（ゐ）ると他（た）の隨（したが）ひ的（てき）共同（きうどう）遊戯（ゆうぎ）即（すなは）ち
 眞（ま）の自然（しぜん）的（てき）要求（ようきう）に則（したが）つて現（あら）はれたる共同（きうどう）遊戯（ゆうぎ）に
 比（ひ）して遙（はる）かに劣（おと）つて居（ゐ）るのは當然（たうぜん）のこと、云（い）はね
 ばならぬ。併（しか）し又（また）一方（いっぽう）には元（もと）來（らい）幼（お）児（じ）の共同（きうどう）性（せい）に基（き）
 いたものであるから多（おほ）數（すう）の中（ちゆう）には隨（したが）ひ幼（お）児（じ）の興（き）味（み）
 を發（は）揚（やう）し全（ぜん）幼（お）児（じ）をして充（み）分に活（かつ）動（どう）せしむるものが
 ないのではない故（ゆゑ）に吾（われ）人は或（ある）一（いつ）部（ぶ）の人の云（い）ふ様（よう）に
 是（これ）等の遊戯（ゆうぎ）を全（ぜん）然（ぜん）幼（お）児（じ）教育（きよういく）より排（はい）斥（しつ）し様（よう）とするも
 のではないが然（しか）りとして從（したが）來（らい）の如（ごと）く之（これ）を以（もつ）て幼（お）稚（ち）園（えん）
 の特（とく）技（ぎ）であるかの如（ごと）く考（かん）へて益（えき）盛（さか）んに行（な）せよう

と云（い）ふものではない。然（しか）らば吾（われ）人の必要（ひつよう）なりとす
 る限度（げんどう）は果（はた）して如何（いか）なる所（ところ）に存（ぞん）ずるかと思（おも）ふに吾（われ）
 人は其（その）標準（ひょうぐん）を一（いつ）に幼（お）児（じ）彼（かれ）自身（みづか）の主觀（しゆくわん）狀態（たいぎ）に求（もと）め様（よう）
 とするものである。即（すなは）ち幼（お）児（じ）が興（き）味（み）を以（もつ）て之（これ）を迎（むか）
 へ興（き）味（み）を以（もつ）て之（これ）を行（な）ひつゝある間（ま）は此（この）種（しゆ）の遊戯（ゆうぎ）が
 幼（お）児（じ）教育（きよういく）上（じやう）に相當（きうたう）の貢（きよう）獻（けん）を爲（な）しつゝあるものと見（み）
 て差（さ）支（し）なへ。併（しか）し之（これ）に反（はん）して幼（お）児（じ）の興（き）味（み）が此（この）種（しゆ）の
 遊戯（ゆうぎ）を歡（かん）迎（よう）せず又（また）遊戯（ゆうぎ）中（ちゆう）に注（ちゆう）意（い）を他（た）に轉（てん）ずること
 多（おほ）く或（ある）は遊戯（ゆうぎ）に關（かん）係（けい）なき自由（じゆう）活動（かつどう）や徒（た）戲（ぎ）や滑（くわ）稽（けい）を
 演（えん）ずる様（よう）になつた時（とき）は最（さい）早（そう）此（この）種（しゆ）の遊戯（ゆうぎ）を課（か）する必（ひつ）
 要（よう）のなくなつた時（とき）で遊戯（ゆうぎ）の種（しゆ）類（るい）を變（へん）化（か）す可（べ）き秋（あき）で
 あると思（おも）ふのである。然（しか）るに多（おほ）くの幼（お）稚（ち）園（えん）では幼（お）
 児（じ）の興（き）味（み）があらうかなからうか頓（とん）と顧（かん）慮（り）する所（ところ）な
 く欠（か）伸（しん）して居（ゐ）るものは抑（おさ）へ付け、徒（た）戲（ぎ）して居（ゐ）るも
 のは叱（し）り付（つ）けて無（む）理（り）やり、之（これ）を強（きやう）制（せい）して居（ゐ）る。吾（われ）
 人は何（なん）等の必要（ひつよう）あつて然（しか）ることを知（し）ることが出來（でき）な
 いのである。元（もと）來（らい）幼（お）児（じ）の遊戯（ゆうぎ）と云（い）ふものは其（その）性（せい）質（しつ）
 としで熱（ねつ）心（しん）と眞（ま）面目（めい）目（め）との充（み）溢（あふ）したるものである。
 從（したが）つて幼（お）児（じ）が其（その）己（おの）れの歡（かん）迎（よう）する遊戯（ゆうぎ）に當（あた）つて熱（ねつ）心（しん）
 と眞（ま）面目（めい）目（め）とを發（は）輝（けい）するは本（ほん）來（らい）の性（せい）質（しつ）である。故（ゆゑ）に

幼兒が熱心に遊戲せず眞面目に遊ばないと云ふことがあつたならば其遊戲は既に幼兒の歡迎して居るものでないといふことは判り切つたことである。而して幼兒に其歡迎せざる遊戲を強行せしめて幼兒教育の目的を達せんことは恰も木に依つて魚を求むるの類であるといふはねばならぬ。人或は一教育は具案的である。豫案は多少強ゆる所あつても差支ない。且又子供と云ふものは常に少しづつは嫌がる仕事に従はせて置くことが必要である」と云ふを直に採つて以て我幼兒教育に行はんとする人があるけれど是は一を知つて二を知らぬ考と云ふ可きである。吾人も日々僅かつは兒童をして努力的勤勞に従事せしむることの教育的方法であることを知つて居る。併し是と同時に其勤勞の内容容たるや必ず多大の實質的價值を持つて居るものであることに注意しなければならぬ。是を惟考へないで以て何等の實質的價值をも有せざる遊戲を彼等幼兒に強行して而して教育的勤勞に従事せしめたなどと思ふて居るのは飛んでもない間違である。斯る人は宜しく願みて古人は何故に遊戲を教育

事項とせず却つて教育上有害なるものと見たかと云ふことに注意すべきである。之を要するに幼稚園の所謂共同遊戲は固より純然たる遊戲であつて同一視す可きものであるが、之を自發的に眞面目に行ふと云ふ點に於て幼兒には大なる教育的價值ありと云ふ丈のこと決して好まぬものに迄も強行せしめても行らせなければならぬと云ふ程のもではないのである。換言すれば幼稚園の共同遊戲は之を幼兒が熱心に眞面目に歡迎する範圍内に於てのみ有効なものであつて決して二六時中常に行はしめて大なる教育的價值ありと云ふ程のものではないのである。以上述ぶる所に因つて所謂唱歌遊戲と云ふものが成程度に限らる可きものであると云ふことは判明したらうと思ふ。然らば將來の幼稚園に於ては果して如何程の分量に於て此種の遊戲を課することか幼兒の要求に相當す可きかと云ふに吾人は多くとも一週平均三回位にて澤山だと思ふ。勿論是は大體の議論で幼兒の興味の發作する時期に因りて

其歡迎せらるゝ程度に因りて或時は數週日の間毎
 日之を行ふこともあらうし或時は數週に亘りて一
 回も行はざることもあつても然る可きであるとは
 思ふが先づ平均したらば一週の中に三回位の割合
 で他の遊戲の中に他の共同遊戲と共に介在す可き
 ものであらうと思ふ。此見地から見れば今日の幼
 稚園が如何に此遊戲を偏重して居るかい知れる。
 又先きに上げたる手紙の主人公が毎朝一度づゝ行
 つて居ると云ふのも寧ろ多い位であると云ふ可き
 である。併し吾人は此方の從事せらるゝ幼稚園の
 設備を知らないから、無暗に之を批評するとは出
 來ない。何故と云ふに先きにも述べた通り元來幼
 稚園の共同遊戲と云ふものは一方に教師の都合か
 ら割り出されたものであるから幼稚園の設備が不
 完全で共同遊戲以外に有益なる他の遊戲をするこ
 との出來ない所では自然此遊戲に多く依頼する様
 になるのは誠に止むを得ざることであるからであ
 る。即ち玩具類や恩物類の設備が充分でなく、遊
 園や花壇や砂場やなどの遊戲具が完全して居ない
 所では止むを得ず是等の遊戲に因つて御茶を濁し

て置く必要があるからである。將來完全なる幼兒
 教育を施さうとする完全にして高等なる幼稚園で
 は決して是等の遊戲に多く依頼す可きものではな
 い。畢竟是等の共同遊戲は慈善的に成立せる托兒
 所的幼稚園に於て比較的少數の看護者を以て多數
 の幼兒を取り扱ひ完全なる教育迄行かずとも有害
 なる影響なからしめんことを主とする消極的保育
 主義を採る所に於て盛んに工夫す可きものであつ
 て人手と費用とを吝せぬ所では然のみ重んずる必
 要のないものと云はねばならぬ即ち幼兒の眞面目
 に歡迎する範圍を限度として課する丈で決して差
 支ないものである。
 次に是等の共同遊戲を行ひ居る場所に就いても大
 に不服を云はなければならぬ。從來の所では何に
 せよ歌曲に合はすと云ふ必要ある爲めに自然樂器
 の傍でなければ活動が出来ず従つて如何に天氣が
 能くとも遊園が美しくとも矢張陰氣な塵芥多き屋
 内を選ぶ様になつて子供は自然の恩恵に浴するこ
 とが少くない様になつて居つた。單に此點からのみ
 云ふても將來の幼稚園は大に改良を要するもので

ある此點に關しては、先きの手紙の主人公は至極適當な處置をして居られると云はねばならぬ。次に唱歌に伴ふ幼兒の手振身振の事に就いて某氏の感ぜらるゝ所は吾人も至極同感である。唱歌は唱歌であつて決して芝居の臺辭や義大夫の假聲ではない。何も一々之を動作に表はさねばならぬと云ふものではないのである。此點に關しては某氏の御意見は悉く吾人の賛成する所であるから此上蛇言を述ぶる必要はないであらう。最後に玩具に關する質問があるが御尤なことである。女子高等師範附屬では近々腰掛付のブランコが設けられるさうである。此他に釣る下がる爲めの金棒や低い並行棒、固定圓木なども至極よからうと思ふ。或醫者に云はせると金棒などは危険だと云ふけれど是は造り方次第で決して危険はないもので畢竟責任を恐るゝ醫者の憶病に過ぎぬと思ふ。此他玩具として毬、フットボール、御手王、細引、の様なものは常に充分に備へ付けられんことを望むのである。それから御尋ねの明治獨樂は色の配合を教ゆる爲めのものとしては面白きもので決して悪い

ものではないが是は觀察的經驗的玩具であつて練習的技能的玩具ではないから前に上げた毬やフットボールと一所に考へてはいけぬ。以上述ぶる所に因つて幼稚園に於ける所謂唱歌遊戯に就いて吾人の思ふ所は略々盡くした様に思ふが多忙の際倉卒に筆を走らせたので説明の足らぬ所や條理の立たぬ所などが無かしと存する。希くは賢明なる會員諸君の御批評を切に仰ぐのである

玩具の話

(今泉雄作氏)

▲園基亂碁碁石遊び 双六と同様に古いのが碁です、正倉院にも御物の碁盤がある、是も元は支那から來た、遺方は御承知の通り種々あるが藤原時代に亂碁といふのがある、其方法は今は判然しませんが本碁の方法を外して打つたのだといふ説が穩當でせう、此説から推すと五目並べの如きが其亂碁の内に入るかも知れませんが、其後四目並べとか三目星とか追々工夫された、此外拾物といふ碁石遊びがある、碁石を種々に並べて一ツ所を二度通らぬやうに拾つて行くと云ふやうな遊びで矢張貞享頃(二百三十年前)から物に見えて居る名目です ▲十六むさし(八さすがり六さすがり) 碁から變化したのが十六むさしで和名抄にある八さすがりと云ふのが元であつたらしい即ち子が八つあつて親の迷道を塞ぐ、今のやうに雪隠詰の場所はない又親が子を喰ふ事はしない又六さすがりと云ふのもあつたが方法は判らん、サスガリと云ふ事は近い頃まで埼玉地方に残つて十六むさしの事を十六さすがりと云ふた

音聲と婦人の氣質

樂 天 子

亞米利加の一俳優は、多年の間觀察實驗したる所に基きて、音聲によりて婦人の氣質を知るを得ると斷言したり。是れ決して據り所なき言にあらざるなり。又或人は「婦人の柔軟なる音聲は、美なる心を惹起す」と言ひき。是もまた信するに足る、他に代りて自己を犠牲にするの用意あることき、純潔なる感情を有する婦人の音聲は大概明瞭に又溫柔にして甚だ柔かなるものなり。音調低くして、よく對話者の心を鎮むることき音聲を有する婦人は利己心に富めるを常とす。若し耻辱を受くる場合は、強く復讐の心を起すの傾あり。されど常に正直に又公明正大に行をなすの美質を有す、かくのごとき婦人は通常伶俐にして、又才能ありて美術の趣味を有す、音調なく又粗野にして強く低き音聲は、概ね快活にして率直の性質を有す。されど此の如き性質を有するもの

は、常に正義を旨とするより、往々急劇殘酷なるに過ぎて、目的する所と全く反對の結果に達するを常とす。

蓋し此の如き婦人は、婦人の服裝したる男子に外ならざるなり、然れども多くは感情に制せらるゝこと稀にして、意志の力甚だ強きを以て、日夜女權の擴張に苦慮し、又時により變に應じて、驚くべき企圖をなすことあり、而して此の如き音聲を有するものは、智力感情共に乏しきを常とす。高く強く俗に云ふ「ヒナリ聲」を有する婦人は必らず權利を振り過ぎ、妻としては「オテンバ」主婦としては、下婢を叱り付け、母としては小言多し、最も恐るべき婦人は屢々音聲の變するものなり。高く響く聲がやがて低くなり、又不満足なる調子となり、少しく怒れば劈く如き聲となりて、其年若き間は男子の愛を得るも、其容色衰ふるに及びては、其夫の心を慰むべき美質なしといふ。



此ころの料理

石井泰次郎

椀

蒸しくわゐ
わんかけ
おろし生姜

(原料) 慈姑二合、木くらげ五勺、かたくり粉十
匁、かつぶし、醤油、みりん、酒、鹽、葛粉、生姜、

くわゐは、皮をよく剥ぎ去り、おろし金にて摺り
おろし置き、

木くらげ(干したるもの)は、水に浸して柔らか
よく洗ひて湯煮し、石づきのかたき所を取り、去
り、幾枚も重ね、くるくると巻きて、端より細く
切り、再び鍋に入れて少しの水、醤油、砂糖等を加
へて煮る、薄あぢをつくるなり。

煮たるさくらげをば、おろしたるくわゐと合せ、
かきまぜ、次にかたくり粉も加へてよく交ぜ、深
みある皿或は其他の器へ入れ、木杓子にて上面を
たひらにならし、さて蒸籠の中へ入れ、湯鍋の上
にかけて蒸すなり蒸し上りたらば、蒸籠より取り

三十二

出し、三つくらゐに切り(前の割合にて三人前く
らゐとしてよし)、器より取り出し、椀に盛り、葛
あんかけ、おろしたる生姜を一つまみほど入
れ、蓋をして進むべし、

葛あんのこしらへ方は湯三合に、けづりたる鰹節
五匁(それより少なくともよし)位の割合にてかつを
煎汁を取り、醤油、みりん、酒、鹽等を加へて、普通
の椀の汁より少しからしと思ふかげんの汁をつく
り、(葛を入れるれば、おまくなる故、少しからめに
なし置くなり)、葛粉を水にて溶き、右手に杓子を
持ち、鍋の中をかきまわしながら、左手にて葛を
入るゝなり、葛の濃くかたまりし所と、うすさと
ころとが出来ぬやう、注意してよく汁の中をかき
まわし、むらなくつくるべし、葛の煮えて汁の色
よくなりし時、鍋をおろしてよし。

あさり剥身の
柚香あへ

むきみは、目簾に入れて洗ひ、鹽湯にてざつと湯
煮し再び簾にあげて雫を切り置き、
よく熟したる柚子の皮を取り、表面ぶのつくゝと

したる所を極うすくむき去り（にが味ある故なり）
内側の白きすじも取り去り、暫く水に浸し置き、て
尚もにが味をぬき、さて湯煮し、やわらかになり
し時、取り上げて毛ぶるひにてうらごしになし、
再び鍋に入れ、砂糖鹽、みりん酒、極少しの醬油等
を加へて程よく味をつけ、火にかけ、木杓子にて煉
り、少しかたきくらゐまで煉りて鍋をふるし、湯
煮したるむきみを入れてわへ小猪口などに盛るべ
し。

◎黄味焼海老のこしらへ方

車海老を、かわを剥き、頭及び尾を去り、脊の方
より開き、脊腸を取り去り、ひらきたるまゝ、金
串をさし（串は、海老を横にして、二本或は三本く
らゐさすなり）、鹽をふりかけて暫く置き（二十分
間ばかり）次に、其鹽をあらひ落し、火にかけて
焼くなり、火はよくふこりたる火にて、兩端に煉
瓦などを立て、其上に鐵橋をわたし、其鐵橋へか
け、火を遠くして焼くなり、一方焼けし時、打返
して又一方を焼き、火の通りたるころ、鶏卵の黄
味のみを落し、刷毛にて、兩面ともよくぬり、火

にかけて、こげめつかぬほどにあぶりてかわかし
かく二三度もぬりては、火にてかはかし、よくつ
くるべし。

さて冷めぬうちに串をぬき、皿に盛るべし、大根
いろしなどをへてよし。

◎けづり牛蒡の葛煮のこしらへ方

あまりはそくなき牛蒡を洗ひて、庖丁刀のうらの
方にて、皮をこそげとり、かんなにて成るべくう
すくけづり、水に入れてよくさらし、次に湯鍋に
入れて湯煮し、やわらかになりし時、湯をしぼり
かつを煎汁、醬油、砂糖等を加へて煮しめ、次に葛
粉を水にて溶きてひき入れ、箸にてかきまわしつ
ゝ、尚も煮て、葛の煮えて色のかわりし時、鍋を
ふるし器に盛るべし。

國民改善學

競馬の馬でも、名馬は幾代も幾代も重ねて淘汰した結果であ
る、今日は最早進化論を人生に應用すべき時代に入つた、不
健康の者や遺傳的の或病氣の者は蕃殖に與らしめぬ様に取締
つたならば、人間の精神身体が代を重ねて進歩するのは疑ひ
を容れぬ、これは國民改善學の一例であるが、今や此學は一
種の學として研究され現に北米インヂヤナ州では法律を以て或
種の人の蕃殖作用を防いでゐる（丘淺次郎）

鹽野奇零

朝寒や地にこぼれたる櫛紅葉
 秋に吊る小さき燈籠や蟋蟀
 はた雲や稻の夕日のあか
 蓋を取る樽柿の香や秋深し
 茸狩に寫生に暮るゝと日かな
 魚釣りて居れば虫啼く後ろかな
 麥蒔や紅葉ちり来る門畑
 遠きより山たそがれぬ紅葉がり
 香を焚く萩の野寺や晝の雨
 草花に月のさしけりきりぐ
 太刀を持つ小姓美し菊の宴
 朝寒き舟に飯焚く煙りかな
 草に座して待つこと久し揚花火
 白けたる米一斗や今朝の秋
 山寺や桐たかくと星月夜
 船頭の追分節や小春風
 今來んと云ひし友あり一夜和
 歡迎の米艦隊や秋日和
 草に聲夜長の哀れ知られけり
 入渡る宇治とはなりぬ落し水
 拜領の頭巾健なり菊作り

全全奇全き全彩全幽全す全梅全田全吟全菊全滴
よ み
零子雲雨れ仙樂郎童泉

西洋の玩具

▲日本人形の流行
近頃西洋では殆んど總ての國

に日本人形が持離されて居るのは實に喜ばしく感
じた佛國で大統領の饗宴に接した時に其室内に日
本人形が飾られて有つたので意外の感に打たれた
而して之れは乾度我々々の爲に特に飾り付られた
屋を見たら大統領の部屋に日本人形が飾られて有
る葉繪書や其他澤山日本人形の繪葉書が有つたの
で初めて日本人形の勢力が解つた値段はと聞くと
普通我が國で六寸物と云つて居る人が二圓四五十
錢位で有る夫れが僅か一代へて西洋人形は普通の
さ位な人形が如何に日本人形が重寶がられて居る
解る近來巴黎杯では日本人形と稱して盛んに製造
して居るが極く下手なもので日本製とは比べ物に
ならない

▲デヤボロの之れは日本では漸く昨年の暮頃か
ら流行出したものであるが西洋には餘程前から流
行して居たのである尤も之れは支那にも朝鮮にも
有つて難書少年世界にはデヤボロの元祖は支那
であつて我元祿時代には條々は流行したものである
其證據には着物の模様などに用ゐて有るではない
か夫が支那朝鮮に傳へ更に西洋にまでも流行する
やうになつたので元祖の日本では疾くに廢つて居
たのである夫れは餘り有難く拙い話だ尚此の外板
有難が作つた人形なども巧拙の差こそあれ全く同
一の趣向から出たものであるから我が在來の玩具
でも美術的に改良して行つたならば決して西洋に
劣ることとは無いのである(久留馬武比古)



黄金の魚

とよ子

むかし、或處に一人の漁夫がありました。至つて正直な、そして働きもので年中朝から晩迄一寸の暇もなく稼いでは居りましたが不思議な事には何時も貧乏で其日を漸く暮して行く丈のことで持つて居る財産と云つては自分等婦夫二人が雨露を凌ぐ草葺小屋、然も軒は傾き柱は朽ちて今にも到れそうな破れ小屋と三度の御飯を炊く釜と籠の外には是と云ふ目ばしいものが見えない位な憐れなものでありました。併し斯んな貧しい暮らしを爲て居ながらも此漁夫妻は頓とつらいと思つたこともなく、苦しいと思つたこともなく人が何を持つて居様が何んな良い着物を着て居やうが自分達は別段見向きも爲ないで、毎日「襦袢」な袴で股引で身構しらへをして夫は海へ行つては魚を採つて來て之を町に賣つたり妻は或時は川へ洗濯に或時は山へ薪切りに行つて一日片時も休まずに働いて居りました。唯時折りの雨休みの日などに徒然の餘りに爐を中にして二人話す時には折々子供のないことをこぼさないではあ

りませんでした。誠に此二人の唯一つの不満足は子供の居ないと云ふことでありました。扱て或日のこと漁夫は例の通り朝飯を仕舞ふと云ふと投網を手にして例の通り海へ魚取りに出掛けました、處が悪い日はいけないもので、漁夫は例の論り幾度も網を投げましたが、今日は何うしたのか一向探れません。漁夫は何うかして明日炊くお米の代だけなりと探りたいものであると一生懸命になつて彼邊、此邊と漕ぎ回りましたが、奇妙なことには鱒一匹捕れませんが、其中に太陽は遠慮なく、西に傾いて今はそろ／＼薄暗くさへなつて來ましたので、漁夫も詮方なくあきらめて段々海岸の方へと歸つて來ました、併し晩の御飯の御惣菜も捕れないでは歸つて早速困る譯と思ひましたので最後の網をとある岩かげの處に投入れて

夫、是でも捕れなければ今日は愈々あきらめめのだ」と一人言云ひながらそろ／＼と繩を手操始めました。スルト網はピン／＼と何物か入つた様にふるへて持つて居た網の端が強く引き

張られましたので、漁夫は急に勢ひ付いて、夫しめた。今度は入つたぞ。何が入つたのか知らと胸をどき／＼させながらにこ／＼もので、網を引き上げて見ると是は如何に一定の名も知れぬ魚、然も全身黄金色をした眼も眩ゆき計りに光つた魚でありました。如何にも珍しい魚なので漁師も我を忘れて暫らく眺がめて居りました、頓て氣が付いて

夫、是は珍らしいものが捕れた。是を町に持つて行つたら定めし澤山なお金になるだらう」と悦び勇んで歸らうとしますと魚は舟板の下から漁師を呼び掛けて、

魚、オイ／＼、漁夫さん／＼、何うぞお願ひ私を逃がして呉れないか、若し逃して呉れるなら私はお前さんの家を立派な家に構へて臺所の戸棚の中には年中造へ立の御馳走が絶間なくある様にして上げるが、何うだね、逃がして呉れないかと頼みました、

が、まんざら虚でもないらしいので漁夫も早速承知して、

夫「宜しい。そう云ふことなら逃がして上やうが。併し今云つたことはほんとうだらうね」と念を押しますと

魚「ほんとうですとも、私は虚なぞ云ふ様なものではありませんよ。併し唯一つお断りして置くことはね。假令誰が何と云はうとも此事は決して人に話してはいけませんよ。若し一口でも此事を喋らうものならば直に家や道具は昔のぼろ小屋ばら道具になつてお前さん達は忽ち昔の通な貧乏漁夫になつてしまひますからお氣を付けなさいと云ひました。

漁師は承知して魚を海に放して急いで自分の家に歸つて来て見ますと是は抑も如何に今迄の穢らしい破れ小屋は何時の間にやら立派な御殿の様なお家となつて屋根にはきれいな瓦が行儀よく並んで恰でお宮の屋根の様、窓を見ると赤や青や紫の色硝子がきれいな模様置き並べられて、今しも西に入らうとする太陽の光が窓硝子に輝り返されてキラ／＼、ピカ／＼と光つて居て何とも云へぬ立派なお屋敷となつて居りました、餘りの

事に漁夫は呆れて暫くは入りもせず立つて眺めて居りました。そして事に因つたら是は自分の家ではなくて人様のお家ではないかと思はれましたので家の中の様子をソツト氣を付けて見て居りました。スルト奥の方から一人の女の人が大層綺麗な着物を着て、然るにこゝと笑ひながら出て來まして、そして、

夫「お歸りなさいまし、大層今日は御ゆつくりで御座いましたね」と云ひますのを能く／＼見ると何のことです今の今迄他の人と思つて居た女の人は自分の妻でありました、漁夫は益々驚いて自分の身体を見ると今迄のぼろ／＼な船頭着物は何時の間にやら立派な着物に變つて居ました之を見て愈あされて

夫「是は／＼」と云つたきり何とも云ひ様がありませんでした。是からと云ふものは今迄の様に寒い風に耳を冷めたくして海の上に働くとも要らず、食べ物がないとてひもじいお腹を抱へて我慢することも要らず、至極安樂に暮して居りました。處が斯うなつて見ると何んにも知らぬ

漁夫の妻は如何にも不思議で勘らないので或日のこと漁師に向つて、

「オ、お前さん、何うして私等はこんなに仕合せになつたのでせう。何うも不思議でなりませ

んねー」と云ひました。漁夫は態と、

「オ、そうさね、何うしたのだらう私にも頓と合點

が行かないよ」と云つて居ました。根が正直な

漁夫は度々妻の不審がるのに見兼ねて或時

「オ、實はね、譯があるのだけれど、決して人には

話さないと言ふ約束をしたから夫れで云はない

のさ」と云ひました。サア、斯う云はれて見る

と何う云ふ譯だか其譯が聞きたくて勘らないの

で漁夫の妻は是からと云ふものは毎日の様に其

譯を聞きました。けれども漁夫は、

「約束をしたのだから決して話されぬ。それに

話さうものなら忽ち元の通りな貧乏にしてしま

ふと云はれたのだから何うも話す譯には行かな

い」と云つて居ましたが妻は何うしても聞かず

には我慢が出来ずまいには、

「オ、その人ではなし私にだけは話しても善さそ

うなものです。ね、私は譯も判らずこんな立派な

所に居るよりも、貧乏でもいゝから譯の判つて

居る方がいゝ」と云ひますので漁夫は詮方なく

「夫れでは」と金の魚の話をしてしまひました、

所が争はれないもので見る／＼中に今迄の立派

な家は何時の間に元かの通りな破れ小屋になつ

て軒の破れから雨が漏り壁の隙間からは寒風が

遠慮なく吹き込んで参りました。今更悔んでも

仕方ありませんので漁夫は其翌日からまた元

の通りな穢ない服装をして朝早くから夜晩く迄

毎日／＼一生懸命に働き出しました。此有様を

見た妻は流石に氣の毒に思つて、

「オ、ア、私があんなに聞かなかつたら、こんな

目にも遣はなかつたらうに、誠に濟まないこ

とを致しました」とあやまることなどありまし

たが漁夫は笑ひながら

「去今更そんなこと云つたつて元の様にはなりは

しないよ。夫よりもマア明朝の仕度でも爲るが

いゝ」と一向氣にも止めないで相變らず一生懸

命稼いで居りました。そうして居る中に或日の

こと、又朝から始めて幾度打つても、一正の小魚も採れない日がありました。漁夫は氣が氣でなく今度は捕れるだらう、今度は間違ならうと頻りにあせつて居りましたが斯うなると網に入るものは木の葉が石ころ位のもので生きたものとは唯の一疋も捕れません。其中に日は早や暮れ掛つて見れば陸の山々は何れも霞み出しまたので漁夫は、

夫「ア、今日も亦疲勞まうけか、仕方がない。夫れでは是れではおしまいにして、と云ひながら最後の一と網を投じました所が網を引き出すと丁度先日の様にブル／＼と網がゆれて確かに何かしら一匹入つた様です。漁夫は扱てな今日のは何んだらうと思ひながら引き上げて見ると是は不思議いつぞや助けて遣つた金の魚です。スルト金の魚は直に聲を掛けて、

若しく、漁夫さん、又御願ひだ逃して呉れないか、其代り家は元の様にするから」と云ひますので漁夫は直に承知して放して遣ると金の魚は大層喜んでそして云ふには、

魚「漁夫さん、今度はお楽しみさんだけに話してもいゝよ併しね、能く、お神さんに話してお置きよ、此上どんなことでも不足を云ふ様なことがあつたら其時は又元の通りにしてしまふからつて、能くそう云つてお置きよ」と云ひながら水底深く沈んで行つてしまいました。

漁夫は心の中に有り難いことだと思ひながら家に歸つて來ますと家は元の通りに立派で臺所には誰れが造らへるのか何時も造へ立の御馳走が澤山戸棚に仕舞つてありまして何の不足もなく安樂に暮して行けました、

漁夫の妻も始の中は大層喜んで是も常日頃正直に律義に働いたお蔭であると頻りに有り難く思つて居りましたが一月経ち二月経ちする中にだん／＼と色々な欲が出て來てそろ／＼不足を云ひ度なりました、併し始めの中は魚に云はれた事もありましたので慎しみに慎しんで居りましたが遂々堪へきれないで時々口元迄云ひ出し掛けて止めることがありました。

此の様に立派なお家に住み安樂に暮して居て夫れ

に不足と云ふものは無さそうですが欲には限りのないもので此上には是非欲しいと云ふものが一つありました。それは何かと云ひますと此漁夫達は段々年を取つてお爺さんやお婆さんになるのにまだ一人の子供もありませんから、何うかして二人ばかりの子供が欲しかつたのです。夫れで或日のこ

と漁夫の妻は我知らず漁夫に向つて

女ね、お前さん、家には子供が居なくて詰らないから何處からか二人ばかり貰つて来ませうかと云ふか云はない中に氣が付いて大急ぎで自分の手で自分の口を押へましたが間に合ひませんフラと眼が廻る様な心持がしたと思ふと家は元の通り穢ないものになつてしまいました。そこで漁夫は亦も翌日から例のきたない服装をして營々と汗水流して稼いで居りますと仕合せのとは、或時また例の金の魚を捕へました。スルト魚の云ふには、

魚イヤハヤ亦も捕つたか、仕方がない。おれの運がないのだからあきらめやう。漁夫さんお前家へ歸へたら私を六つに切つて二つはお前さん

がお喰べなさいますとお前さんの家は是からは何時迄も立派で居るでせう。それから二片はお神さんに遣つて残りの二片は庭にお埋めなさいと云ひましたので早速歸つて其様にしました。暫くする中に漁夫のお神さんは二人の男の子を産みました。其子供が生れると一所に庭に埋めた二片からは二本の百合花の木が生えました。そして不思議なことには此二本の百合花が子供

の丈夫な時は花も葉も勢よく咲いて居ますが子供が病氣にでも掛ると百合も然も病氣にでも掛つた様な風にうなだれて居ます、誠に不思議なものでした。

二人の子供は見るからに可愛らしい子で誠にすなはな、そして活潑な、然も大層伶俐な子供でありました。

かくて二人の子はだん／＼大きくなつてもう直大人になる時が来ました或日のこと二人の子供は漁夫の前に来て云ふには
二人のお父さん、私達は是から餘外の國へ旅をして来様と思ひます」と云ひますので漁夫は大層感

心して

夫それは感心だ、随分氣を付けて御出よ」と云ひましたがお母さんは之を聞いて可愛い子供を知らぬ旅に出すのは心配だから、止してはいと云ひましたが二人の子供は「お母さん私達は今に豪い人になるんですから少しの間お庭の百合を私達だと思つて辛棒して居て下さい」と云ひますので母親も安心して二人を旅に出して遣りました。一人は東の方の國へ行つて其國の王様になり、一人は西の方の國へ行つて其處の王様のお婿様になりました。二人とも一年に一度づゝ漁夫の家へ御機嫌伺ひに来て、お土産には金銀、珊瑚、綾錦、數々の品物を持つては近所の人達に分けて遣りますので老人夫婦此上もなく仕合せに暮して行きました。

めでたし~~~~~。



本會は振替貯金へ加入せり

會員諸君の御便利を計り本會は今般振替貯金へ加入致し口座一七二六番を所有致し候就いては爾今會費は勿論御注文の書籍代若しくは購入御依頼の物品代等は御最寄の郵便局にて同番へ御拂込相成候はい別に爲替料を要せず然も最も安全に本會へ到達致す可く候尙同番へ御拂込の際拂込書用紙の裏面なる通信欄へ何事にても御記載相成候はい別段はがき其他の郵便を要せず本會へ相知れ可申候斯かる便法相開け候以上は充分に御使用の上爲替料郵便料等御攝約なさる可く御勸め申候尙記帳料金貳錢は本會に於て負擔致候に付御拂込は成る可く一年分宛御拂込下され度餘り少し宛御拂込相成候ては本會は其度毎に貳錢宛の損耗相生に候に付其邊御察し下され度候

明治四十一年十一月 フレーベル會

振替貯金口座一七二六番

月刊産科婦雑誌

購読希望者は日本産科婦協會員となり一ケ年分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に九年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見えんとす産科婦雑誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むべからず二段組十八行の植字は自ら内容の豊富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては竊に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ

(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尙高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむることに試験準備の諸姉に對しては無二の良師友と謂ふも強ち誇大に非ざるべしと信ず

明治四十一年十一月

東京市日本橋區濱町三丁目七番地

産科婦人科楠田病院内

發行所

日本産科婦協會

(電話浪花一六〇番)

フレーベル會發行

幼稚園遊戲

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてであります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレーベル會發行

幼児談話材料

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なるものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

●●豫約募集●●

フレーベル會編纂

幼稚園遊戲的小學校手工圖形

右は主として幼稚園に於ける手技及小學校の初學年に使用せらる可き手工の圖形約四百個を蒐集したるものにして新教育主義の實現上必要なる教材書なり。本會は特價金壹圓を以て五百部を限り豫約募集す希望者は至急申込む可し、但し應募者既定數に満たざる時は出版せざる可し。

東京女子高等師範學校内

明治四十一年八月

フ
レ
ー
ベ
ル
會

定價

金壹圓五拾錢

郵稅

未詳

卷一第書叢育教兒幼

東京女子高等師範學校教授 中村五六
東京女子高等師範學校助教授 和田實 合著

幼兒教育法

菊版美裝紙數約二百五十頁
定價金壹圓 郵税金拾錢
フレール會員一割引

一名改良せらるたる幼兒保育法

教育の隆盛前古に比なき明治の聖代にも未だ幼兒教育に關する系統的説明を試みたるものなく所謂名士の斷片的言説の徒に世人を迷はするのみ。是本書の因つて出づる所以なり。世の父兄たる教育家たるもの精讀せざる可からず。

發行所

東京女子高等師範學校内

フレール會

發賣所

東京市神田區表神保町

東京堂

賣發りよ日一月本製既